

2021年11月28日（日）

＜待降節（アドベント）1 主日礼拝＞

宣教 『惜しまれる神』

テキスト：ヨナ書4章1～11節

教会の暦では、本日から待降節・アドベントに入りました。ローソクが1本灯っています。4つ灯るとクリスマスです。アドベントは、イエス・キリストの誕生を待ち臨みつつすごす時です。救い主イエスはすべての人の救いのために来てくださったのです。アドベントという言葉は、「到来」という意味のラテン語で日本語では「待降節」と訳されます。クリスマス前の4週間、心の準備をする時で、またキリストが再び来られること「再臨」の希望と喜びをもって待望する季節にもあたります。

ヨナ書の学びも今日で最終回です。3章までは、いかがでしたか？
今日は4章から神さまのことばを聞きましょう。

1:ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。

「このこと」というのは、ヨナが神の命令で、再度ニネベに行き、40日したらニネベの街は滅びると神さまから聞いた言葉を人々に伝え、ニネベの人々は民衆も王様も、自分たちの悪い行いを反省し、罪を懺悔し、悪の道を悔い改め、正しい生活を送ろうとしたのです。そこで神さまは、ニネベの人々を思いやり、禍をお止めになるという決断をされます。

このことなのです。神さまの決断は、ヨナにとって「大いに不満であり、彼は怒った。」のです。ヨナはニネベの街が滅びる事を願っていたのです。

この時のヨナの心は、神さまの命令で一度は拒んだのに、再度行ったにもかかわらず、神さまが考えを変えられる。ヨナによっては、自分は一体何のために故郷を離れ、遠い外国のニネベまで来たのか、「もうやってられない。」という感じでしょいか。

ヨナは神さまに抗議します。というか食ってかかります。

2:彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。ヨナは先に神のニネベに行け、という命令に背いた言い訳をし出します。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。」と。それほどヨナは頭に来ていたのです。しかし、神への信仰を捨てることはしなかったのです。神さまとのやり取りをやめないのです。ヨナは、神が

ニネベの人々への裁きを止めたことが納得できないのです。夜も眠れぬほど悶々としたかのようにです。ヨナの心の深くにニネベの人たちへの裁きを願う、求める思いがおりのように溜まっていたのかもしれませんが。今はヨナはもう自分の預言者としての立場、対面がないと思ったのでしょう。ヨナには、狭いイスラエル中心主義、外国人への軽蔑心があったと言わざるをえません。自分でも自覚できない悪い気持ちが苦い胆汁のように噴出して来たのかもしれませんが。人間が心を支配する罪から解放される、赦され贖われるには、神の子イエスが十字架に死なれるしか道はなかったのかと思わされます。

3:主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」とヨナは言い出します。

列王記19章4節(p.565)によれば、あのイスラエルの預言者エリヤも、イゼベルに命を狙われそうになった時、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。」と訴えています。

怒るヨナに対して、主なる神ははっきりと言われます。

4:主は言われた。「お前は怒るが、それは正しいことか。」と。

ヨナ書が演劇になれば、ここで幕がいったん下がるかのようです。

「お前は怒るが、それは正しいことか。」との神さまの問いかけに対する、沈黙の時間が続くかのようです。

さて、聖書では、

5:そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。

この小屋は、木々の枝と葉で作った簡素なものであったと言われます。

ヨナは、都から離れて、今後都がどうなるのか、様子を見ようとします。ここでヨナは逃げません。以前は神の元から逃げたヨナはもう逃げないヨナになっていたのでしょうか。自分で見届けるのです。

ここから、神さまのヨナへの最後の愛の教育が行われていくかのようです。

神はヨナを選び、ずっとヨナに愛の眼差しを向けて見ておられたのです。

たとへヨナがどこに行ってもです。主により頼むわたしたちにも当てはまることだとわたしは信じます。

6:すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。

このトウゴマの木は、いろんな種類があるようですが、文語訳聖書では「瓢（ひさご）」と訳されています。 トウゴマは、一年生植物で、高さ2～3Mほどになるそうです。怒りに燃えていたヨナの心から、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ、と報告されています。

ここで注目すべきことは、ヨナは神さまの配慮や好意を喜んだのではなく、この「トウゴマの木」を喜んだのです。人間の不満と喜びについても考えさせられます。継続する真の喜びは神さまに感謝することから沸き上って来るのです。神さまの備えられた「喜び、祈り、感謝」の泉があるのです。その泉はついに枯れることはないのです。

7:ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。

「ところが」大変な「ところが」です。

8:日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。「生きているよりも、死ぬ方がましです。」

「東風」は、パレスティナ地方の東の砂漠地帯から吹いてくる熱風のことです。ヨナは耐えきれず、再び「生きているよりも、死ぬ方がましです。」と、死を願います。憎めない正直なヨナです。

そのヨナに神さまは、優しく語りかけられます。

9:神はヨナに言われた。「お前はとうごまの木のことと怒るが、それは正しいことか。」彼は言った。「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」優しい父親に甘える子どものようなヨナです。

10:すると、主はこう言われた。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。

11:それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」

「惜しむ」という言葉は、「憐れむ」ということと同じ意味です。ヨナは、トウゴマ木を惜しみ、死んでも良いとさえ言い切りました。神さまは、「ニネベを惜しまずにいられるだろうか。」と言われました。聖書の神さまは、惜しまれる神、憐みの神さまです。もちろん不正を拒まれる正しい神さまです。

時が満ちて、神は、その独り子イエスをお与えになったほどに、世を愛されたのです。クリスマスは必ずやって来るのです。

神の子イエスを自分の主と受け入れることが、真の正しさであり、神の憐みを

受けることのできる道であることを信じます。主イエスは人生を生きて行く正しい命の道です。この道は御国へとつながっているのです。そのことを信じ感謝します。 主の平安を祈ります。

- 1:ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。
- 2:彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。
- 3:主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」
- 4:主は言われた。「お前は怒るが、それは正しいことか。」
- 5:そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。
- 6:すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。
- 7:ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。
- 8:日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。「生きているよりも、死ぬ方がましです。」
- 9:神はヨナに言われた。「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか。」彼は言った。「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」
- 10:すると、主はこう言われた。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。
- 11:それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」